研究論文

誰が雪舟を画聖にして来た（いる）のか？

―画聖神話をめぐる近年の研究動向と今後の課題―

福島恒徳

はじめに

日本美術史上で最も有名な作家の一人である雪舟のイメージは、生前から現代まで間断なく語られ続けた結果、中世の画家としては際だって理想化された神話に彩られている。そして今日においても美術史研究者はそれらから完全に自由にはなっていないように思われる。

すでに、一九八九年、近代以降の雪舟イメージの基本である「日本的水墨画の完成者」というイメージの見直しが、戸田禎佑氏によって提唱された（「雪舟研究に関する二、三の問題」『日本絵画史の研究』吉川弘文館）のをはじめ、一九九二年、島尾新氏による雪舟同時代史料の読み直しがおこなわれる（「雪舟等楊の研究（一）―雪舟のイメージ戦略―」『美術研究』三五一号）など、雪舟についての近年の研究は作品や史料の根本的な見直しを通じて、理想化された雪舟イメージの解体とイメージ再編の試みを始めており、その後の研究に極めて大きな示唆を与えてきた。

山下裕二氏による主として戦後における雪舟認識の検討から現在までを扱った論攷（「雪舟に対する認識をめぐって」『文化財の保存に関する国際研究集会　今、日本の美術史学をふりかえる』東京国立文化財研究所編集・発行　一九九九年）や、近現代における雪舟に関する言説集（山下裕二編・監修『雪舟はどう語られてきたか』平凡社ライブラリー四二四　二〇〇二年）さえ世に問われるようになってきたのは、日本の美術史学史研究の必要性が高まったことと連動するものでもあるだろうが、純粋に雪舟研究が抱える「雪舟観」「雪舟イメージ」の問題が、検証すべき重要な問題であることを示してもいるだろう。

一方で、島尾氏の研究とその方向性を批判的にみる綿田稔氏の意見（「雪舟入明補遺―シンポジウム報告と「破墨山水図」のこと―」『天開圖畫』六号　二〇〇六年）もある。もちろん、実際に行われてきた近年の研究は、どちらにも完全には与しないものであること

は当然で、もはや、島尾・綿田両氏の、いわば正反対とも言える論調は常に歩み寄りつつ、より正確な雪舟像の探求が進んでいるのが現状だろう。例えば、二〇〇六年、山口県立美術館で開催された「雪舟への旅」展に際して発行された『雪舟等楊――「雪舟への旅」展研究』図録（山口県立美術館・雪舟研究会編　「雪舟への旅」展実行委員会発行　以下、雪舟への旅展図録と呼ぶ）では、両氏が編集に携わり、現在までの研究の集大成を目指した編集方針も相俟って、書物自体としてはある意味でバランスのとれた研究業績となった。

ここでは、戸田・島尾両氏の論攷に導かれながら、雪舟神話すなわち理想化された雪舟イメージを概観する。まず同時代史料について述べる。さらに従来あまり語られてこなかった近世における雪舟観を画論画史などの史料を用いて概観し、その節では、通常あまり大きく紹介されることのない近世史料や、近世の雪舟画伝来事情などを含めて少し詳しく論じたい。さらにこれらを通じて大きな問題としてあらわれる雪舟の道釈人物画をめぐる問題に触れ、さらに筆様制作の問題についても言及する。全体として、今日の雪舟研究において当面検討すべきいくつかの問題がいくつか提起できればと考える。なお、本稿では個別具体的な研究成果の一々をあげて批判することは行わない。一般論・抽象論に終始しかねない憾みはあるが、ご寛恕願いたい。

山水画家　画聖雪舟

雪舟の作品というと、多くのひとがまず山水画を思い浮かべるであろう。「山水長巻」（毛利博物館）、「秋冬山水図」（東京国立博物館）、「破墨山水図」（東京国立博物館）や絶筆とされる「山水図」（大原家）、やや特殊だが山水景観を描く「天橋立図」（京都国立博物館）などが、とりあえず脳裏に浮かぶはずである。近代以来、雪舟研究の中心はつねに山水画であり続けてきた。

もちろん個々の研究者によって雪舟研究における主要作品の認識にはずれがあるが、とりあえず研究文献を網羅的に拾い上げると、一見して山水画が大半を占めているようである。例えば、これも近年の雪舟研究の重要なまとまった業績と言ってよい（異論もあるようだが）、二〇〇二年の『没後五〇〇年特別展　雪舟』図録（東京国立博物館・京都国立博物館編　毎日新聞社発行　以下没後五〇〇年展図録と呼ぶ）所収の文献目録（研究者レベルではあまり網羅的とは言えないが、現在の所、最も使い易い雪舟研究文献目録である。ちなみに編者は島尾新氏。前述の雪舟研究集大成とも言える雪舟への旅展図録の文献目録は網羅的なようでいて、執筆者が用いたもの以外は収載していないため、雪舟研究者以外の利用には向かない）を参照すればわかる。

現在、代表作とされるものはほとんどが山水画であり、道釈画などは軽視される傾向にある。ここでは一々あげないが、国指定文化財に指定されているものを一覧すると、やはり山水画が大半を占めている。伝称作品、有力作品として展覧会や書籍などで触れられる

もの、例えば先述した没後五〇〇年展出品作品などは、広いジャンルに目を配って作品選択がなされる傾向が強まっており、同時代の専門画家的画僧の作画領域全般にわたる山水・人物・花鳥などの幅広い作画領域が想定されてはいるものの、主な研究対象は現在も山水画と言ってよいだろう。これは真筆・代表作のほとんどを山水画としている状態を抜けきれない、現在の大きな課題である。

山水画家雪舟というイメージは、「最も山水に長ず」と銘記する『本朝画史』をはじめ、江戸初期の画論にすでにみられ、これが現在まで基本的には画家イメージの骨子となっている。近世の画論画史における雪舟関係の記事を収める文献をリストアップすると（「雪舟関連記事所収主要画論画史」参照）、多数の近世絵画論が雪舟関連記事を収めていることから、そのさすがの知名度を再確認できるが、内容にはやや意外なものもある。

ここでは詳しく触れることができないが、実はそれらの多くが雪舟の作画の中では山水画を好意的に論じ、その他の領域にはあまり詳しく触れていない。当時の雪舟イメージがすでに山水画以外の作画領域を軽視させていたことを示している。全体的な傾向として、現在までつながる山水重視の雪舟イメージが、江戸時代の画論画史類の著者たちのなかに定着しつつあったことが認められる。雪舟の道釈人物画が江戸時代に多く遺存していたことは、画論画史や模本・縮図（これらについてはあらためて後述する）において大量の伝称作品が見いだされる点から類推できるが、論じられることは少なかったわけである。

こうした山水重視・道釈画軽視の理由にはいくつかの要素があると考えられるが、そのひとつは、これらの画論を書いた人たち、たとえば江戸初期における狩野派の画家たちや幕末の南画家や文人たちが仏画を主要な作画領域としていない点があげられる。しかし、それ以上に、雪舟自身の周辺で好意的な起草者によって記された記事によるイメージ形成の影響が大きいという点を確認しておかなければならない。これがまさに前述した島尾氏の示唆に大きく負う視点である。

同時代史料　禅宗周辺の史料

雪舟に関する伝記的な要素を含む同時代史料は多く、これらに記された断片的な事柄をもとに現在における雪舟の伝記は組み上げられている。しかしそこには、島尾氏の指摘されたとおり、雪舟自身による自らの理想的イメージ形成がみえるのである。それは禅僧としての正統性、すなわち高い宗教的精神性を備えていること。中国文化の体現者としての正統性・すなわち文人士大夫的性格を備えていることのふたつである。

詳しくは島尾氏に譲るが、ここで確認しておきたい事は、これらの同時代史料のほとんどが、ある程度雪舟本人の意向に従ってつくられていると想定できる点である。雪舟自身が書いたもの。雪舟がその場で直接依頼したケースなど、雪舟との直接的な関係の場で書かれたもの。直接的な関係の場での成立ではないが、雪舟の人脈のなかで好意的に書かれたもの。この三種類が大半を占めているという事である。

しかもこれらの史料の中で最も詳しく、最も重視されているものが、雪舟自身が書いた明応九年の「破墨山水図」序文や、雪舟が直接頼んで書いてもらったと考えられる寛正五年翺之慧鳳の「揚知客に寄す并びに序」、同じく文明八年呆夫良心・文明十八年了庵桂悟の、二つの「天開図画楼記」である点も十分に注意が必要である。

これらの史料が多くの歴史的事実を含んでいることは疑いないと思われ、ある程度は検証可能な部分もある。しかし同時に、雪舟を中国の古典的画家たちの正統を引きつつ、高い宗教的精神性を具備した人物としてイメージづける美辞麗句が並んでいるのもまた確かなことである。このことはもちろん五山文学僧たちのレトリックに習熟してはじめて言えることではあるが、日本における文人士大夫的教養人としての禅僧たちが書き、そして雪舟自身もその文人士大夫的教養を重んじていたことは、いまさら述べるまでもないほど明らかな事である。

それら理想化されたイメージの中では、「禅の正統」「中国の正統」という雪舟周辺の、そして恐らく雪舟自身も狙ったイメージからすれば、職業画工的作画領域として道釈画は軽視される傾向にあり、反対に胸中の邱嶽を描くような山水画の領域に重きがおかれている。同時代史料のなかにすでに山水を主要な作画領域とする「画聖雪舟」型の既成概念を生み出す要素が含まれており、画聖型雪舟神話の大枠がすでに成立しているのである。

一時、相国寺という当時五山派最大派閥の拠点にいながら、終生知客という禅僧としては比較的低い地位にあった雪舟。「破墨山水図」に漢文に堪能ではなかったとも評価される長文を自ら書いた雪舟。秋月に与えた自身の頂相に自賛を書かなかった雪舟。そして身分不相応とも言われる道号を自ら名乗った雪舟。自らは「四明天童第一座」と署名しながら、「揚知客」と呼ばれ続けた雪舟。こうした事柄が、すでに島尾氏らの指摘から問い直されている。見方によっては、雪舟の真の姿と理想的な画聖のイメージとのあいだにかなりの開きがあるようにも思われるのである。言うまでもなく、もちろん我々雪舟研究者は、真の姿を知る必要がある。

ここで問題にしなければならないのは、限られたそれらの同時代史料の解釈が、論者によって必ずしも一定しないという現状、つまり定説がないという事実である。史料の解釈が一定しないのは様々な歴史学的研究分野において往々にしてあるが、それが放置されることはあまりない。研究の進歩にともなって、史料は読み直されていくのが普通だろう。筆者の雪舟史料に対する基本的認識については前段で少し触れたが、筆者は、雪舟同時代史料の多くが禅宗周辺で作られた史料である点に、非常な研究上の困難を感じている。極端な言い方をすると、禅僧の伝記やその歴史上の意義について、自らの力で全てを解決することはほぼ不可能だと感じている。実際、筆者に限らずこれまでの室町水墨画研究者の多くが（さらには禅宗史研究者でさえある部分は）、著名な禅宗史研究者である玉村竹二氏の業績（あまりに多いのでここでは列挙しないが、『五山禅僧伝記集成』だけをあげておけば十分だろう。）に依拠して、自ら史料探索を行うことにあまり情熱を注がない傾向がある。それ故に、過去に多くの単純なミスあるいは、誤解訂正の機会を失ってきたのも事実であろう。

こうした現状を踏まえて逆の方向から考えれば、雪舟のような著名作家についてさえも、今後重要な史料が発見される可能性は十分にある。美術史家であっても禅宗史料をはじめとする史料を探索し、読んでいく力を必要とされるのは言うまでもないことだろうし、現在の史料探索が不十分であることは前述したとおりである。もちろん、近年の雪舟研究はおおむねこの方向で進んでいる。ここ十年ほどは、禅宗史料ではさほどでもないが、むしろ地方史などの領域において、直接・間接に雪舟研究に関わる史料が意外なほど多く見出され、紹介されてきた。その他にも多くの史料が次々と紹介されている現状は、雪舟への旅展図録の解説・論文を参照すれば一目瞭然である。

一口に雪舟同時代史料におけるイメージと述べてきたが、以上のように禅宗史料を十全に解釈できない今、この方面の研究はまだまだ途上であると言えよう。

近世、近現代における雪舟イメージの変遷

さて、近世以降の雪舟評価、特に幕末期のそれが「画聖型」と「中国亜流型」に分かれることは前述の論文で戸田禎佑氏の指摘されるとおりで、いずれの型においてもおおむね「中国の正統」を引くか否かという、文人士大夫的文化における価値観を評価の分かれ目としている点で、前代以来の雪舟評価を引き継いでいる。これらの多くが主として山水画を論じ、仏画を評価の対象とはしていないようである。「雪舟関連記事所収主要画論画史」の表で、◎は雪舟を特に高く評価していると考えられるもの。○は雪舟を比較的重視して詳しく記述しているもの。無印はわずかにふれるもの。△は比較的否定的色彩の濃いものである。

江戸前期、狩野派をはじめとする漢画諸派は、如拙・周文以来の宋元の古格を尊重した作風を基礎として作画していたため、同じく宋元の大家にならっていた雪舟を肯定的に評価している。作品や史料を通して近世漢画の画師たちにおける雪舟の扱いを考える試みはすでにかなりの蓄積があり、雪舟研究の中心的存在と言ってよい山口県立美術館の雪舟流・雲谷派関係の展覧会などをはじめ、その業績は着々と積み上げられている。近年では近世以降の雪舟伝の中核をなす『本朝画史』の雪舟伝に関する五十嵐公一氏の研究（「本朝画史・雪舟伝について」『天開圖畫』四号　二〇〇二年）のような、本格的史料分析の論攷も発表されるようになってきたことは、雪舟研究の深化に確実に寄与している。

近世漢画諸派の画論画史をみると、彼らはやはりいくつかの雪舟同時代史料を引いて雪舟の伝記をつくり、同時に雪舟周辺によるイメージ形成にも影響され、画聖型の雪舟イメージを定着させているようである。さらに、有名無名の雪舟弟子筋の画家たち多数に関する記事を収録し、巷に流布した伝説の類をも採録するなどして、雪舟の画聖神話はより確固たるものとなっていった。

これら画聖神話の近世における形成過程は、単純にそれだけを取り上げても興味深く、ましてやそういった観点からの研究は、雪舟以外のどの画師にも適用し難いであろう事が推測されるので、今後も進めていくべき重要な課題だろう。

さて、近世の画論画史のうち、やがて各地に起こる明清の文人画を尊重する南画派が論じたものはどんな論調であっただろうか。一般的に、『山中人饒舌』で雪舟流に関する記事は収録しないと明言している田能村竹田をはじめ、日本の文人たちは、雪舟をあまり高く評価していない。南画派の隆盛とともに雪舟の声価は相対的に低下していき、主として軽視するというかたちで雪舟に学ぶ漢画を攻撃した南画派画人たちの著作には、雪舟関係記事は少なくなっていく。

幕末に至るまで膨大な量の雪舟粉本を作り続けた狩野派・雲谷派などの漢画諸派が相変わらず雪舟を重視していたにしても、全体として、近世における雪舟イメージは、近世初期漢画諸派によって画聖としてのイメージが定着・増大し、それに対して新興の南画派が異論を唱えて行くという流れになっているようである。そんな中で、中林竹洞は、雪舟の山水画は日本では最高だが、中国にはもっと優れた画家が多数いたはずだと述べており、当時の「中国亜流型」雪舟イメージの複雑さを示しているが、そこから発展し、南北両派の主張を総合したうえでの雪舟イメージは幕末まで形成されることはなかったようである。こうして時代は移り、明治維新による漢画諸派の消滅、南画派の凋落を経て、主として西洋的視点による雪舟イメージの再編が行われることになる。そこで形成される論調は、当然ながら、前時代である近世におけるイメージを多かれ少なかれ引きずっているようであり、全体としては漢画諸派による肯定的なイメージを受け継ぐものが多い。現在多くの日本人が日本美術史上でも最も重要な作家と「感じている」雪舟の国民画家としてのイメージのもとは、近代において決定的に形成されたと言ってよいようである。

明治時代になるとまずフェノロサによる雪舟再評価がなされ、明治末期の代表的雪舟研究文献である沼田頼輔著『画聖雪舟』（斉藤玉英堂　一九一二年　復刻『画聖雪舟』論創社　二〇〇二年）の出版をはじめ、明治・大正を通じて『国華』誌や高級な美術書などに多くの雪舟作品が掲載されている。その間、展覧会への出品も相次ぎ、一般書にも雪舟に関する文章が相次いで発表され、コレクターたちも競って雪舟作品を蒐集し、有名作品が次々と増えていく。このあたりの事情を考える上では、島尾新氏による労作の資料集（「雪舟画伝来資料近代編（稿）」『天開圖畫』二号　二〇〇〇年）などをはじめとする業績に注目したい。同氏によって諸処で折に触れて言及されてきたこの近代の雪舟ブームについては徐々に認識が深まりつつある。そうした成果をみるにつけ、明治政府による国策をベースに、西洋的美術史学の形成期にあったアカデミズムや政財界などが主力となって着実に雪舟は国民的画家への道を歩まされたように思える。おそらく明治美術の研究者にとっても恰好の研究対象であるのだろうが、この問題については現在、筆者の手に余る。明治時代の美術動向を専門とする研究者による本格的な論攷を期待しつつ、ここでは今後の課題としておく。文化的に西洋に伍していこうとしていた時代の日本の国策と雪舟評価との関係は、本稿の趣旨からも詳しく取り上げるべき興味深い問題であるが、現代へと話題を進める。

近代以降、雪舟周辺が意図したのとは別の、近代的・西洋的意味

での画聖へと雪舟イメージは変貌していくことになった。そして、国民的画家としての社会的認識が大きく広がりを見せ、現在の一般的雪舟イメージの核が形成されたのが、わずか約五十年前の一九五六年のことである。この年は一般的に考えられている雪舟の没年永正三年から四五〇年目にあたる記念の年であり、四月に東京国立博物館、十一月に京都国立博物館で大規模な雪舟展が開かれた。このころ、文化財保護委員会による日本古美術展という、欧米・南アジアなどに日本の古美術を持って行き、日本文化を紹介しようとする計画も新聞で大きく取り上げられるなど、当時の対外関係と連動する国の文化政策の動向とも関連して、雪舟ブームと言えるような現象が起きていた。前年、世界各国の共産主義者たちによる平和主義団体である世界平和評議会で、世界十大文化人に選ばれたというニュースもあり、敗戦からたちなおり、世界の大国の中に文化国家として参加していこうとする人々のあいだの雪舟ブームに拍車をかけた。

ここでこの動向について詳しく述べる紙幅はないが、一例をあげておこう。一九五六年四月六日の朝日新聞に掲載された美術評論家野間清六の文章は「雪舟へ世界的な関心」と題され、中共・チェコ・ソ連・ハンガリーなどで開催された雪舟展（資料・模写等の展観か）のことや、世界平和評議会において、レンブラントやモーツァルトらとならぶ文化人と認定されたことを誇らかに紹介している。ちなみに、共産主義国家における雪舟評価がいかにして成立し、そこにどんな人々が荷担したかは、日本の教育・文化行政の性格に関わる微妙だが重要な問題であるので、これについては、当時の文化政策全般の検証とともに今後調査を進め、いずれ稿を改めて提示したいと思っている。

ともあれ、雪舟はこのころ日本を代表する画家として認識されることになった。そこでは、雪舟に西洋的芸術家のイメージが重ね合わされ、結果として、例えば「天橋立図」のような実景に基づく絵画について西洋的写実主義的性格が強調されたり、逆に日本を描いたということで日本人のアイデンティティが強調されたりするというようなことが起こった。そこには、西洋に伍しうる国民的芸術家としての、現代における画聖雪舟イメージが成立していると考えられる。もちろん当時からこれらの、言わば「雪舟をダシにした」様々な言説について批判的な意見もあったのだが、それは大きな声として受け継がれてはこなかったのである。

道釈人物画

以上で、雪舟イメージ変遷の過程ついての概説とそれらをめぐる近年の研究動向、残された課題などについての概観を終える。以下は、現在筆者が取り組むべき問題と考えているふたつのテーマについてのアウトラインである。

ここでまず取り上げるのは、前節で述べた雪舟ブーム以降の、雪舟の作画領域における道釈人物画の扱いについてである。西洋に仏画はない。そのために、雪舟の道釈画は、「慧可断臂図」をはじめとする、作品として突出した表現力を持つ一握りの名品を除いて、ほとんど無視されたままに放置されることになっていく。やはり近

代的芸術家にとって、図像や彩色に制約の多い、言い換えればオリジナリティの見出しにくい道釈人物画は、積極的に評価しづらかったのではないかということである。

雪舟の道釈画については以前概略を論じたことがあるので（「雪舟の道釈画について」『花園史学』二四号　二〇〇三年）それを参照していただきたいが、近年ではこの道釈画軽視の傾向に対しても、既に意識的に是正していこうとする論調が一般的となった。既に前述の没後五〇〇年展でも、従来の展観より多くの道釈人物画がとり上げられており、雪舟への旅展でも資料的な作品も含めて大きく扱っている。

雪舟が後半生の活動の根拠地山口で、禅宗寺院に所属していたことは間違いなく、画僧として道釈画制作の活動が想定されるが、大内氏の最も重要な禅宗寺院である香積寺をはじめ、主要な寺院が現在では廃寺となり、そこにあったはずの雪舟の作品も、香積寺旧蔵の「維摩図」を除いて今はない。近世の記録類たとえば江戸時代に長州藩によって編纂された『防長寺社由来』などには雪舟筆とされていた道釈画が相当数記されているが、それらも現在では行方を追うことができなくなっている。

作品・史料の両面で雪舟の道釈画作家としての側面を検討する材料は豊富とは言えない。しかしながら、近世における雪舟の道釈画に関する資料としては、画論画史類でも少なくはない数の史料をあげることができる。雪舟関係の書籍類でこれらをまとめて収載するものは少ないので、煩雑ながら重要なものを抄録しておいた（「画論・画史類における雪舟の道釈人物画史料抄」参照）。

「探幽縮図」（文人画研究所・京都国立博物館両者がそれぞれ発行した『探幽縮図』から抄録した「探幽縮図の雪舟画」参照。その他の「探幽縮図」はここでは割愛した。）などの模本資料には山水画よりむしろ仏画のほうが多く、画史・茶会記などの記録でも、雪舟の仏画が頻出する（「東京国立博物館蔵狩野家模本における雪舟道釈画の画題」および「茶会記における雪舟道釈画の画題」参照）。江戸時代のある時点までは、現存作品は山水画より仏画のほうが多かった可能性が高い。そしてこれらの史料からだけでも、仏・菩薩・羅漢・祖師・仙人さらには神像・肖像という種々の道釈人物画を描いていた雪舟の広いレパートリーがうかがえる。

また広い意味での伝雪舟作品に加え、雪舟の道釈画研究に有効な手段としてさらにもう一つ、主題・図様・描法のいずれにおいても雪舟の直接的影響下にあった直弟子筋の画家の作品をも視野に入れることが必要であろう。特に秋月等観・周徳・雲溪永怡・等春・如水宗淵ら、史料から直接的な師承関係が考えられる画家の作品は雪舟画を強く反映していると考えられ、雪舟画の復原には重要な意味を持つ。雪舟の道釈画が旧来の日本絵画、宋元画そして恐らくは新来の明画など実に様々な要素からなっていることはざっと見ただけでも確認できる。詳しくは拙著『室町時代の雪舟流』（共編著　山口県立美術館発行　一九九三年）を参照願いたい。

日本的水墨画家

日本的水墨画の完成者、近代的自我に目覚めた芸術家という決ま

り文句は、現在でも一般書の雪舟に関する記述でごく普通にみることができる。前述の通り、それは近代以降に作られた近代的作家イメージである。それがいわゆる「画聖」イメージの一部をなしていることは明らかだろう。日本の絵画史上、極めて個性的と言える作風を実現した雪舟には、近代芸術の研究では当然の手法である作家の内面研究をおこなってみたくなる誘惑にかられる。雪舟の場合同時代史料が多いこともあって、特に興味をそそられる。

そこで注意しておきたい問題として、筆様制作をめぐる問題をあげておきたい。中国の有名画家にならって、〇〇様というかたちで作画するのは、室町時代の画家にとってはごく一般的なことだったが、これは近代的芸術家観をもつ現代人にはわかりにくいことかもしれない。というより日本的水墨画の完成者にして、近代的自我に目覚めた芸術家には、他者の作品をもとにする作品はそぐわない。「伝模移写」は近代では通用しないということである。

戦後の雪舟ブームのなかで数十本もの学術論文が書かれたが、雪舟の筆様制作に詳しく触れるものはわずかで、現在もその文脈で雪舟作品を検討した成果は十分ではないだろう。たびたび触れてきた東京国立博物館・京都国立博物館の没後五〇〇年展においては、担当者救仁郷秀明氏らによって、従来にないほど雪舟の中国絵画学習について大きく取り上げられていたし、根津美術館で開催された「明代絵画と雪舟」展という展観もあった。同展図録（根津美術館編集・発行『明代絵画と雪舟』　二〇〇五年）における板倉聖哲・島尾新両氏による論攷と解説は、従来の枠を越えた大きな業績である。東アジア的視点による日本美術研究が叫ばれて最早久しいが、この観点からも雪舟研究は深化を見せている。そしてこの視点は前述の戸田氏の論攷に示唆された方向性である。

この視点からの筆者の見解を言えば、雪舟は最もうまく筆様制作をこなした画家ではないかと考えている。ひとつにはまずその筆様を体得した画家の数が多いことである。雪舟は牧谿・玉澗・夏珪・李唐・高克恭・米元暉・顔輝・梁楷といった多数の画家の筆様で実際に制作している。中国絵画至上主義で、筆様による制作を前提とした作画が多かった室町時代において、このことは画家としての幅の広さとして肯定的に捉えうる。同時代作家でここまで幅広い画師はいない。

「揚知客に寄す并びに序」では顔輝・牧谿を、呆夫良心の「天開図画楼記」では、呉道玄・梁楷・馬遠・夏珪・玉澗・高克恭・易元吉・銭選・牧谿らの名前をあげて、雪舟の画技の広さを讃えている。雪舟の依頼による文章であるから割り引いて考えなければならないが、この史料は、現存作品と合わせて、雪舟の筆様制作重視の姿勢をあらためて認識させてくれる。さらに、「破墨山水図」が玉澗様、「山水長巻」が夏珪様というように、代表作をまさに筆様制作のなかで生み出しているということ。そしてそれらが、師倣する宋元の大家を十分に意識させて筆様制作としての基準を満たしていると評価できることを強調しておきたい。つまりここで述べておきたいのは、むしろ、雪舟は当時最も広いジャンルの中国的な絵が書ける画家であり、かつ最も中国的な水墨画を描いた日本人画家として捉える視点が必要なのではないかということである。これは現代の画聖イメージとは相反する作家像である。

ところが、雪舟はやはり個性的な画師である。筆様制作作品であっても、どこか雪舟風の作品になっていることは否定できない。そしてその個性を「日本的」という評価に短絡させている場合があることに注意すべきである。その「雪舟風」が「日本風」であるとする根拠を示すことは難しい。確かに雪舟の作品が中国絵画そのままであるとはとても言えない。よく引き合いに出される「流書手鑑」（東京国立博物館）中の倣牧谿作品などは、実際の牧谿作品とはあまりにかけ離れている。しかし、雪舟同時代における牧谿イメージを復原しなければ、この作品における雪舟の「日本的」度合いは評価できないだろう。

室町時代における日本人の中国絵画認識に関わる問題は、雪舟研究に限らず、その他の中国由来の絵画ジャンル全般における課題であろうし、安易に「日本的」と述べがちな日本美術史研究者に対する中国美術史研究者の批判は甘んじて受けなければならない。筆者は中国絵画についての深い認識なしに、安易に雪舟を「日本的水墨画の大成者」としてきてはいないかと自問するのである。戸田氏の指摘するように、雪舟の作品を一般に言う日本的水墨画と呼べるのかどうかという問題について、雪舟研究者も答えなければならない。近代的芸術家観によって沈黙させられた感がある雪舟の筆様制作の態度についての検討は、今後の課題として残されている。

最後に、雪舟の現存作品のなかで最も中国的な作品について触れておく。筆者は渡明中に描いた「四季山水図」（東京国立博物館）を最も中国的作品であると考えており、そこには同時代の日本の画家の作品には全くみられない深みのある空間構成がおそらく初めて実現されている。筆者の考えでは、雪舟の個性を形成する要素のうち、最も大きなものは空間構成力が優れている点である。雪舟の大きな特徴である強い中国的な趣は、主として空間構成力からきていると考えられ、その点で本作品は雪舟の作風変遷を考える上で極めて重要な位置を占める。従来賛否両論がある、渡明で劇的に画風を変えたか否かという問題は、拙宗を名乗っていた時代の作品が乏しいことや、渡明前後の作品の編年が十分でない現在、容易に結論は出ないだろうと多くの雪舟研究者が考えているが、当然ながらその議論は、中国絵画的空間構成力が渡明によって得られた可能性を示唆する「四季山水図」を中心に論じられるべきである。前段の趣旨と関連して言えば、中国で得られたものは「日本的」なものではなく「中国的」なものであったはずなのである。

おわりに

前述のように、雪舟の画聖イメージは雪舟生前から長期にわたって醸成・温存されてきたものであって、我々現代人のなかにも拭いがたく存在するだろう。同時代史料から近世・近代さらに現代まで、歴史学のあらゆる分野の研究者が、歴史的に作られてきた「自分の頭の中身」について考えている。美術史家も自分たちはどこから来たのか、真剣に考えている。それをどのようにおこなっていくのかについて、雪舟という画師をめぐって考えていきたいと思っている。本稿ではさしあたり、同時代史料の解釈の問題、道釈人物画の問題、筆様制作をめぐる問題などに簡単に触れたが、少なくともこれらが

雪舟研究において重要な問題であることに異を唱える研究者はいないであろうし、美術史学史的視点においても重要な研究対象であることは多くの研究者が認めてくれるだろうと考えている。

本稿では、雪舟を画聖として認識してきた歴史を概観し、近年におけるそれらからの脱却の歩みを評価するとともに、今後の課題めいた事柄も多少ながら述べてきた。雪舟研究の末席を汚しているに過ぎない筆者が言える筋合いではないが、ごく最近、一部の研究者が、本稿でも対象とした近年の研究に対する非建設的とも思えるようなやや感情的かつ否定的評価を下す場合が少なくないことが気になっている。論争が行われること自体は健全なことであり、歓迎するものであるが、筆者自身の感想を言えば、近年の雪舟研究は大きな進展を遂げたと評価したい。まさに雪舟の真の姿に近づく大きな進歩であったと言ってよいと考えており、その点を本稿の各所に述べたつもりである。

[附記]

本稿は、二〇〇八年二月十八日、神戸大学美術史研究会にて発表する予定で準備の途中にあった内容をもとに文章化し、加筆したものである。論文と言うよりは概論風の文章とさせていただいているのは、そうした事情による。実際におこなった発表は、同研究会直前に筆者が発見した新たな「雪舟二字説」（花園大学今津文庫）に関する話題を中心とした。この新史料が雪舟の年表の書き換えを促すほどの極めて重要な史料と判断されたため、筆者の独断で発表時間の大半を使って緊急報告として発表させていただいた。こうした経緯から、本誌への投稿をお勧めいただいた折りに、本稿の一応の構想はすでにあったが、今回の成稿にあたり、近世における問題の部分を中心に資料紹介を含めた内容に書きあらためてみた。本来、研究会で述べるはずだったものとは、この点で内容を異にすることとなったが、本稿をもって研究会における本来予定した発表に代えさせていただきたい。

福島恒徳（ふくしま・つねのり）
一九八八年　九州大学大学院文学研究科修士課程修了
山口県立美術館学芸員
二〇〇〇年　花園大学文学部専任教員
現職　花園大学文学部文化遺産学科教授

画論・画史類における雪舟の道釈人物画史料抄

出典を記さないものは全て坂崎担編『日本絵画論大系』より引用

1

『等伯画説』　日通上人　源豊宗『考注等伯画説』

一　禅月大師ト云ハ人形書上手ノ内也　雪舟十六羅漢ハ禅月ノヤウ也ト

一　禅月大師　人形書也雪舟ノ人形ニ禅月ヤウ多有之

能登ニくじしト云在所有之惣持寺ト云寺有之そこニ雪舟ノ十六羅漢アリ

唐紙一枚ツツニ墨絵也眷属モ無シ又無別物龍ト猿トアル歟ト

惣持寺ハ日本国ノ会下の本寺也

2

『墨蹟之寫』　江月宗玩　竹内尚次『江月宗玩墨蹟之寫禅林墨蹟鑑定日録の研究』

一　徳山禪師肖像

紙燭親吹滅、機前起祖風、手中無活棒、何以碍丰鋒、

實傳宗眞　拜讃、

徳山像、雪舟筆、上ノ賛アリ、道閑ゟ來也、今は愚僧所持也、

一　朶桃花笑不言、靈雲錯滯思兒孫、若無悟道罣）心上、天下合呼稱達尊、

紫林懶衲龍室叟　拜書

右、雪舟筆、桃花悟道圖之賛、

一　踰雪嶺於六白、自憐耐苦寒、見明星於八夜。人言認定盤、

日種子漫題

爲慈篤上人四明天童第一座雪舟筆

出山釈迦

（下略）

一　冷眼稜々勢絶倫、太半梁魏動烟塵、鯨波長此惡芽孽、一葦輕飛瞞却人、

喝一喝云、看脚下、遠孫實傳叟　拜賛、

雪舟筆

渡江達磨

（下略）

3

『丹青若木集』　狩野一溪

雪舟　楊知賓　號等楊、亦名備楊、善手跡及圖繪、好師周文、其名馳于世、洛下東福寺之天徳院開山無夢派僧也、丹陽雲谷寺者無夢開基也、舟此居座時號雲谷、畫釋道人物山水花菓鳥獸魚蟲介及松竹楳蘭鼠姑或猿鶴鷺雁荷葦着色墨畫等、筆力搖動秀潤一々無不精妙、作墨畫龍虎宛如生、尤精佛像、所圖水墨希也矣、爲法入明到天童山、任于第一座位、明朝而長有聲與李在二人並馳、師習超過二師遠甚畢、歸朝後筑紫〔庵座〕常愛童形、多作小畫與之云々、當代畫家雖學舟之傳神難及、世人甚稱愛之、故僞者居多也、畫上名印、印非于一、印字爲等楊或雪舟矣、長祿二年〔後花園院御宇〕三月十五日、南泉寺於描眞院自周文舟被授畫書君臺觀、明應乙卯舟七十四歳、自是一百三十餘歳八旬有餘、圖繪間傳當代、長州留年、或人舟備後州庵座、于時備楊云々、藝州佛通寺遊戯、亦周防山口行履。

4

『扶桑名公画譜』　浅井不舊

等揚　號拙宗不知世姓自書畫後曰日本禪人等揚、曾師雪舟能畫墨觀音或謂等揚始用楊字後改揚字也。

（略）或曰舟歸朝而後山陽之間名圖鉅寺院留畫跡、常愛童形多作少畫與之、至其妙處則得之天性、不踐古人縱跡而既立一家、尤長於山水人物次之花鳥又次之兼善牛馬而龍虎次之、好畫鍾馗數到千幅矣、凡於人物牛馬一點筆而成、此法始自雪舟、常好水墨少設丹青專尚風致、故大抵寫意不求形似、筆力位置清氣豪放聊有無墨法、但傳于世者無不至妙也、（略）

5

『本朝畫史』　狩野永納

拙宗　畫墨觀音、出自周文筆意。

6

『畫乗要略』　白石花陽

僧雪舟　雪舟名等楊、備中人、工畫善畫、專法宋人於夏珪梁楷尤爲深詣、嘗入明登四明天童山爲第一座焉、歸朝後不喜設色、畫史云學設色於李在者非也、長山水人物兼工花艸翎毛、又工畫龍、筆力圓勁墨痕淋漓自爲一派、凡人物馬牛減筆有生意、減筆之格蓋創于雪舟。

7

『本朝畫纂』　谷文晁

拙宗　等楊畫墨觀音學牧溪筆意（鍾馗圖）　※原本の図は黄初平図

8

『近世名家書画談』　安西雲煙

因に云、豫樂院殿雪舟が畫ける維摩の大幅長二尺八寸横二尺五六寸もあるべきを毎度御圍の床に掛たまひしを、かかる大幅を何として掛らるるにやと伺しに夜會の茶に御掛遊ばさるるとなり。

9

『此君堂後素談』　立原翠軒

上註曰、近代世事談洛の八十村路通云、渡唐天神の像は雪舟より始る。

（略）

愚案、我邦ニテモ、佛道人物牛馬ハ、則巨勢、宅摩、可翁、殿主、周文、雪舟、元信ノ諸子、皆厚重遒勁天然ニ出テ、後學ノ者終ニ能及ブ者ナシ。

10

『輪翁畫譚　屋代弘賢

雪舟壽老人一幅

11

『画記』　林閲苑　美術研究第八十五号「画記（公刊）」

「靈龜山天龍資聖禪寺什物畫記」

墨画人物三幅小軸　雪舟

中傳大士左懶山右岩頭

墨畫達磨一幅　雪舟

「本法寺什物古畫」

淡彩羅漢十六幅中軸　雪舟

右雖有雪舟名記筆法不似　雪舟

「真如堂什物」

同（着色）羅漢十六幅大軸　雪舟

12

『増訂古画備考』　朝岡興禎　『増訂古画備考』

○雪舟跋陀羅像一、

○雪舟布袋自畫賛、不覺不智、獨住無益、不和不合、俱住無益、不謗放逸、持戒無益、不知邪路、廣化無益、不識正道、多聞無益、識了愚横、學文無益、無慚無愧、智者無益、内外虚化、聖人無益、用心朦昧、坐禪無益、行學徒絶、僧形無益、

○洞益所持、探幽摹、雪舟維摩像、立壹間餘許、横五尺餘、絹墨薄繪具あり、見事、箱に爲香積寺常住、雪舟圖之、寛文元十二月九日寫、安藝守殿給之、右筥にはる、筥の裏に、此維摩像者、以雪舟圖、寛文元年十二月九日、探幽法印寫之、天明二年八月、美信加毫復修造也、洞春舊物今猶在家、

○雪舟達磨讃

這漢何曾有眼睛、漫誇傳法救迷情、定知擔水河頭賣、來者徒行十萬程、

徑山癡絶和尚賛焉（一凍）野狸子拜書

一凍ハ大徳寺百廿六世、天文弘治永祿元亀天正ノ人也、文祿三五月出世、慶長十一四月去、一凍ノ紹嫡字野狸子ト云、壽七十四、澤庵和尚ノ師也、

○渡唐天神墨繪、無情沅江現神通、千里飛梅一夜松、萬事夢醒山吐月、観音寺裏五更鐘、薩天錫　爲浦上則宗、行年七十一備陽雪舟筆、養朴縮図

萬松山齋年寺、尾張智多郡大野村にあり、曹洞宗、城主佐治駿河守、天文元年の創建也、華雲和尚を以て開山とす、寺寶二祖立雪圖一幅、佐治上野介、天文元年の寄附にして、雪舟七十三歳の筆也、罕世の奇品、實に大幅の名畫なり、尾張名所圖繪

茶会記における雪舟道釈画の画題	東京国立博物館蔵　狩野家模本における雪舟道釈画の画題	
・釈迦	・釈迦	・寒山拾得
・足洗釈迦	・出山釈迦	・布袋
・文殊	・文殊	・布袋唐子
・普賢	・普賢	・渡水布袋
・観音	・地蔵	・寿老
・瀧見観音	・観音	・福禄寿
・三十三像観音手鑑	・千手観音	・神農
・阿弥陀如来	・円窓観音	・鍾馗
・達磨	・魚籃観音	・鍾馗騎驢
・岩洞達磨	・阿彌陀	・鍾馗騎虎
・達磨丸色紙	・不動明王	・蝦蟇鉄拐
・五祖	・魔利支天	・張果老
・六祖	・弁財天	・道士
・寒山	・大黒天	・天神
・寿老人	・羅漢	・渡唐天神
・福禄寿	・十六羅漢	・風神雷神
・鍾馗（極彩色）	・維摩	・竹林七賢
・鐘馗	・達磨	・商山四皓
・神農	・面壁達磨	・虎渓三笑
	・蘆葉達磨	・人丸
	・五祖	・蘇東坡
	・六祖	
	・石鞏	
	・南泉	
	・豊干	
谷晃氏作成		*『東京国立博物館収蔵品目録』*
『茶会記データベース』による		*（昭和27年12月10日発行）による*
詳しくは同氏		
「茶会記にあらわれた絵画」		
（美術研究362号）参照		

雪舟関連記事所収主要画論画史

画論画史名	著者	成立年	評価	備考
等伯画説	等伯・日通	1592(文禄02)頃	◎	末流を自称
丹青若木集	狩野一溪	1662(寛文02)	◎	多数の史料を引き、詳しい
弁玉集	著者不詳	1672(寛文12)		
画工便覧	新井白石(伝)	1672(寛文12)	○	詳しい
本朝画法大伝	土佐光起	1690(元禄03)		
本朝画史	狩野永納	1693(元禄06)	◎	多数の史料を引き、詳しい
図書考略記	一枝軒梅船	1696(元禄09)	◎	多数の史料を引き、詳しい
画筌	林守篤	1712(正徳02)		
扶桑名公画譜	浅井不旧	1736以前(元禄享保頃)		多数の史料を引き、詳しい
画巧潜覧	大岡春卜	1740(元文05)	○	関連記事多し
三暁庵雑志	木村探元	1767(明和04)	◎	末流を自称
画譚鶏肋	中山高陽	1775(安永04)		
画則	桜井雪館	1777(安永06)	◎	12世末流を自称
絵事鄙言	桑山玉洲	1779(寛政11)		
国画論	平沢旭山	1788(天明08)		
画道金剛杵	中林竹洞	1801(享和01)	○	山水を評価、中国亜流
竹洞画論	中林竹洞	1802(享和02)	○	山水を評価、中国亜流
山中人饒舌	田能村竹田	1813(文化10)	△	雪舟流未収
輪翁画譚	屋代弘賢	1818以前(文化年間)		
皇朝名画拾遺	桧山義慎	1819(文政02)	○	雪舟流多数収録
文画誘掖	中林竹洞	1819(文政02)		
此君堂後素談	立原翠軒	1823(文政06)以前	○	伝説数話収録
近世逸人画史	岡田樗軒	1824(文政07)以前		
屠赤瑣々録	田能村竹田	1829(文政12)		
近世名家書画談第1編	安西雲煙	1830(天保01)		
画乗要略	白井華陽	1831(天保02)	○	詳しい
竹田荘師友画録	田能村竹田	1833(天保04)		
無名翁随筆	池田英泉	1833(天保04)	○	関連記事多し
嵩鶴画談	桜井嵩鶴	1833(天保04)		
本朝画纂	谷文晁	1834(天保05)以前	○	雪舟流多数収録
容斎画意	菊池容斎	1840(天保11)		
文晁画談	谷文晁	1841(天保12)		
近世名家書画談第2編	安西雲煙	1844(天保15)		
槃礴脞話	森島長志	1844以前(天保頃)	△	山水評価せず
続近世叢語	角田九華	1845(弘化02)		
椿山書簡	椿椿山	1846(弘化03)		
漱芳閣書画銘心録	浅野楳堂	1857(安政04)		
雲烟所見略伝	清宮秀堅	1862(文久02)		
松柳問答	池上休柳	1866(慶応02)		

ｼﾞｬﾝﾙ	作品	品質	所載図録	番号	巻冊等名称
花鳥	芦雁	紙本墨画	文人画研究所	18	掛幅
	芦雁	紙本墨画	文人画研究所	18	掛幅
	芦雁	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	芦雁図	紙本墨画	京都国立博物館	16	花鳥・走獣図巻
	芦雁図	紙本墨画	京都国立博物館	16	花鳥・走獣図巻
	花	紙本墨画	文人画研究所	1	和漢梅竹花鳥図巻
	鴨図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	枯木小禽	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	鷹図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	梅図	紙本墨画	京都国立博物館	30	和漢古画冊
	梅竹小禽	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	柳鷺、柳鴉、中福禄寿三幅対	紙本淡彩	文人画研究所	18	掛幅
山水	一帆山水	紙本淡彩	文人画研究所	付1	法橋雲川斎縮図巻
	山水	紙本淡彩	文人画研究所	28	雪舟山水図巻
	山水	紙本淡彩	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	3	和漢山水人物図巻
	山水	紙本墨画	文人画研究所	3	和漢山水人物図巻
	山水　三図	紙本墨画	文人画研究所	3	和漢山水人物図巻
	山水　二図	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	山水図	紙本墨画	京都国立博物館	40	山水図巻
	山水図	紙本墨画	京都国立博物館	40	山水図巻
	山水図	紙本墨画	京都国立博物館	40	山水図巻
	山水図	紙本墨画	京都国立博物館	38	和漢古画冊
	舟山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	雪景山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	瀧見山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	破墨山水	紙本墨画	文人画研究所	15	山水人物花鳥図画冊
	破墨山水	紙本墨画	文人画研究所	8	和漢山水図巻
	破墨山水図	紙本墨画	文人画研究所	3	和漢山水人物図巻
	破墨山水図	紙本墨画	文人画研究所	4	山水人物図巻
	破墨山水図	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	破墨山水図	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	破墨山水図	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	破墨山水図	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	破墨山水図	紙本墨画	文人画研究所	3	和漢山水人物図巻
	富士山	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	富嶽	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
人物	騎馬人物	紙本墨画	文人画研究所	2	和漢山水人物図巻
	曲芸	紙本墨画	文人画研究所	2	和漢山水人物図巻

探幽縮図の雪舟画

ｼﾞｬﾝﾙ	作品	品質	所載図録	番号	巻冊等名称
人物	山中対話	紙本墨画	文人画研究所	7	和漢山水図巻
	雪中騎馬	紙本墨画	文人画研究所	5	人物山水図巻
	束帯図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	竹林七賢	紙本淡彩	文人画研究所	31	学古帳
走獣	玉龍	紙本墨画	文人画研究所	13	龍虎図巻
	獅子	紙本墨画	文人画研究所	14	龍虎図巻
	龍	紙本墨画	文人画研究所	13	龍虎図巻
道釈	中白衣観音両騎驢人物図(拙宗)	紙本墨画	京都国立博物館	27	道釈人物図巻
	寒山図	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻
	観音	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	岩上釈迦	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	騎獅文殊図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	騎獅文殊図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	釈迦	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	釈迦左右羅漢三幅対	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	樹下禪師(霊雲観桃)	紙本墨画	文人画研究所	2	和漢山水人物図巻
	拾得	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻
	十六羅漢のうち八葉	紙本墨画	文人画研究所	18	掛幅
	十六羅漢のうち八葉	紙本墨画	文人画研究所	18	掛幅
	出山釈迦	紙本墨画	文人画研究所	6	和漢山水人物図巻
	出山釈迦三幅対	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	出山釈迦図	紙本淡彩	京都国立博物館	38	和漢古画冊
	出山釈迦図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	鍾馗	紙本墨画	文人画研究所	16	人物画九紙貼交二曲屏風一隻
	鍾馗	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	鍾馗図	紙本墨画	京都国立博物館	29	神仏図巻
	鍾馗図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	鍾馗図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	神農	紙本墨画	文人画研究所	2	和漢山水人物図巻
	雪舟図	紙本淡彩	京都国立博物館	42	雪舟図
	祖師図	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻
	達磨	紙本墨画	文人画研究所	15	山水人物花鳥図画冊
	達磨	紙本墨画	文人画研究所	5	人物山水図巻
	達磨図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	達磨図	紙本墨画	京都国立博物館	27	道釈人物図巻
	達磨図	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻
	達磨図	紙本墨画	京都国立博物館	37	人物図巻
	達磨図	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻
	地蔵菩薩図	紙本墨画	京都国立博物館	29	神仏図巻
	中出山釈迦図左右龍虎図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	中出山釈迦両蓮図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	中白衣観音両芦雁図	紙本墨画	京都国立博物館	39	和漢古画冊
	中白衣観音両芦雁図	紙本墨画	京都国立博物館	39	和漢古画冊
	鉄拐仙人	紙本墨画	文人画研究所	2	和漢山水人物図巻
	天神	紙本墨画	文人画研究所	5	人物山水図巻

探幽縮図の雪舟画

3

ｼﾞｬﾝﾙ	作品	品質	所載図録	番号	巻冊等名称
道釈	渡唐天神	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	渡唐天神	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	29	神仏図巻
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	29	神仏図巻
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	白衣観音図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	布袋図	紙本墨画	京都国立博物館	44	仏像祖師画冊
	布袋図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	布袋図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	布袋図	紙本墨画	京都国立博物館	34	人形仏絵蚕図巻
	布袋図	紙本墨画	京都国立博物館	45	仏像祖師仙人花鳥獣画冊
	文殊	紙本淡彩	文人画研究所	18	掛幅
	文殊	紙本墨画	文人画研究所	付2	宗信筆探幽縮図写巻
	文殊獅子図(?)	紙本墨画	京都国立博物館	39	和漢古画冊
	文殊図	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻
	蘆葉達磨図	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻
	蜆子和尚図	紙本墨画	京都国立博物館	32	道釈人物図巻